

母への手紙

文 山田清一郎

絵 (水切り絵) 森田みどり

水切り絵とは一新聞紙のカラーページを水を含ませた筆でなぞり手でちぎって、貼って作る切り絵です



お母さん、あの時10歳だったあなたの子供は、今72歳、お母さんが亡くなった年をはるかに超えて生きています。でも私は、お母さんがいつで死んだのか覚えていません。昭和20年6月5日、神戸大空襲であなたが“生き埋め”になってから60年以上もを過ごしています。その年の3月に父も同じように空襲で焼き殺されましたね。

あの戦争さえなければ、あの時母と一緒に死んでいれば、こんな思いをせずにすんだ…と、戦争孤児の辛すぎる生活に、生き延びた命を恨みながらも、見えない母に支えられて私は生きてきた。その亡き母に感謝の思いと平和への願いを込めて母の命日である6月5日に書いたものです。



6月の空襲で逃げ込んでいた防空壕が、激しい焼夷弾攻撃で崩れ落ちてきたとき、「早よう逃げるんや！」と言って、掴んでいた私の手を離し、私を外へ強く押し出した時のお母さんの怖い顔を今も覚えています。あなたは私を助けるために生き埋めになってしまったのです。あの時どんな思いであの手を離したのだろうか。そこに母親のわが子への絶ち難い思いがあったのではないかと思うと、今でも私は胸を締め付けられます。



戦争孤児となった私は、同じ浮浪児の仲間達と、戦後の荒れ果てた町で、周囲の人から野良犬のように追われ、バイキンの塊と呼ばれながら、そこに「存在する」こと、そのものが罪であるような社会を、ただ「生きる」ためにだけ生きてきました。それはまさに、野良犬にふさわしい「捨るか、もらるか、盗って食うか」の生きざまでした。あなたが命を犠牲にして守ったわが子のそんな惨れな姿を見たら、どんなに哀しむでしょうか。

戦争孤児となった私は、同じ浮浪児の仲間達と、戦後の荒れ果てた町で、周囲の人から野良犬のように追われ、バイキンの塊と呼ばれながら、そこに「存在する」こと、そのものが罪であるような社会を、ただ「生きる」ためにだけ生きてきました。それはまさに、野良犬にふさわしい「捨るか、もらるか、盗って食うか」の生きざまでした。あなたが命を犠牲にして守ったわが子のそんな惨れな姿を見たら、どんなに哀しむでしょうか。



戦争孤児施設を出て社会に放り出されてからも、誰からの援助もなく「たった一人で」生きていくのは、想像を絶する厳しいものでした。

戦争孤児施設を出て社会に放り出されてからも、誰からの援助もなく「たった一人で」生きていくのは、想像を絶する厳しいものでした。



孤児になった10歳から27歳で教師として自立できるまでの17年間「生きていて良かった」と思えるようなことは殆どありませんでした。何よりも辛かったのは、自分には「帰る故郷がない、支えてくれる家族がない」「たった一人」という孤独感でした。

孤児になった10歳から27歳で教師として自立できるまでの17年間、「生きていて良かった」と思えるようなことは殆どありませんでした。何よりも辛かったのは、自分には「帰る故郷がない、支えてくれる家族がない」「たった一人」という孤独感でした。



何度も「死」を考えながら、それでも「とことん生きてやる」という思いにさせてくれたのは、私が巡り会い、そして散っていった義児の仲間や、空襲で焼き殺された父親、自分を犠牲にして私を守り、生き埋めになったままのあなたの無念な思いに対して、「母さん、ここまで生きてきたよ」と、自分が生きが証しを残したからです。私はその「見えない母」に支えられて生きてきました。

何度も「死」を考えながら、それでも「とことん生きてやる」という思いにさせてくれたのは、私が巡り会い、そして散っていった孤児の仲間や、空襲で焼き殺された父親、自分を犠牲にして私を守り、生き埋めになったままのあなたの無念な思いに対して、

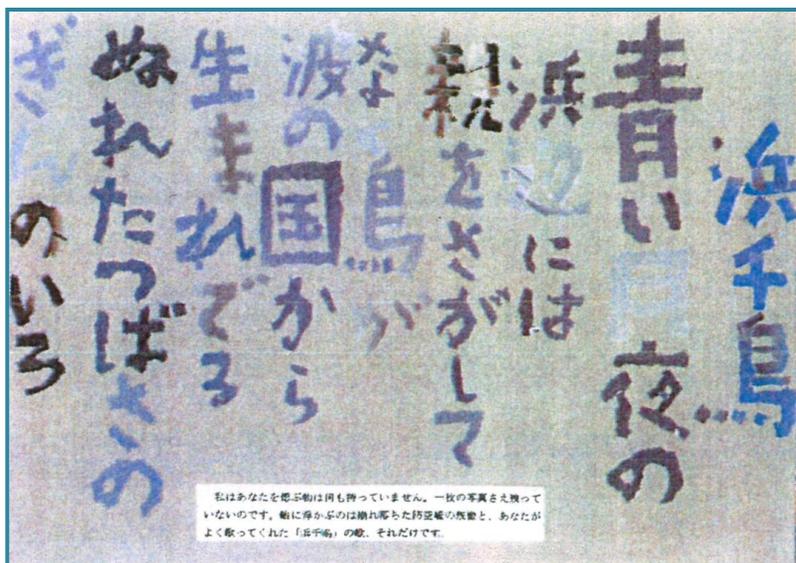
“母さん、ここまで生きてきたよ”

と、自分が生きて証しを残したかったからです。私はその「見えない母」に支えられて生きてきました。



“生き延びた命を恨み野良犬は 怒りを胸に荒波越えた”
あの激しい空襲の戦火や、浮浪児のどん底を生き延びた、その命を喜ばず恨みに思い、怒りを抱いて生きる…。誰が戦争孤児にしたのか？ その、怒りの声をどこに向けたらいいのか、とても悲しい人生ですが、それが私達戦争孤児の「生きざま」だったので。

“生き延びた命を恨み野良犬は
怒りを胸に荒波越えた”
あの激しい空襲の戦火や、浮浪児の
どん底を生き延びた、その命を喜ばず恨みに思い、
怒りを抱いて生きる…。
「誰が戦争孤児にしたのか」その、怒りの声を
どこに向けたらいいのか、とても悲しい人生ですが、
それが私達戦争孤児の「生きざま」だったので。



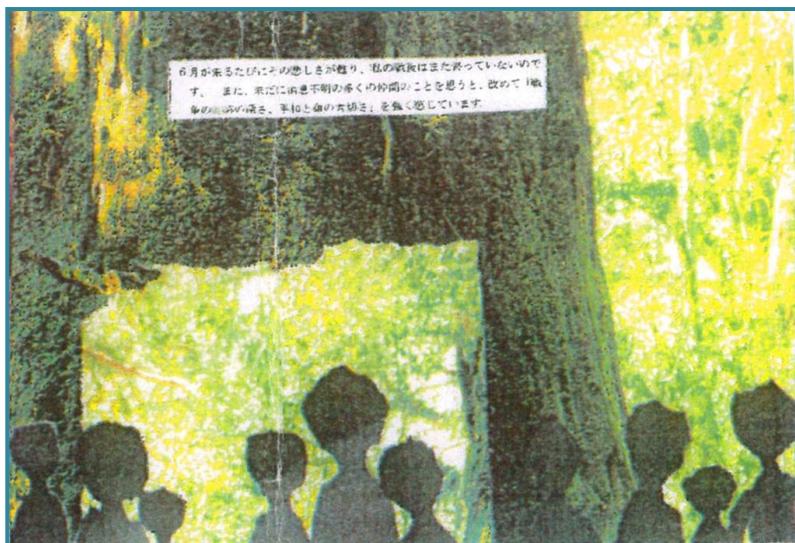
私はあなたを偲ぶ物は何も持っていません。一枚の写真さえ残っていないのです。胸に浮かぶのは崩れ落ちた防空壕の残像と、あなたがよく歌ってくれた「浜千鳥」の歌、それだけです。

私はあなたを偲ぶ物は何も持っていません。一枚の写真さえ残っていないのです。胸に浮かぶのは崩れ落ちた防空壕の残像と、あなたがよく歌ってくれた「浜千鳥」の歌、それだけです。



11歳で悲しみと恨みしかない故郷神戸を捨てて60年、私は故郷に一度も行っていない。帰りたいと思わないのです。ふるさがないということはとても淋しいことです。私にはあの防空壕がその後どうなったのかわかりません。今も“生き埋め”のままなのだろうか。

11歳で悲しみと恨みしかない
故郷神戸を捨てて60年、私は
故郷に一度も行っていない。
帰りたいと思わないのです。
ふるさがないということはとても淋しいことです。
私にはあの防空壕がその後どうなったのかわかりません。
今も“生き埋め”のままなのだろうか。



6月が来るたびにその悲しさが甦り、私の戦後はまだ終わっていないのです。また、未だに消息不明の多くの仲間のことを思うと、改めて「戦争の傷跡の深さ、平和と命の大切さ」を強く感じています。

6月が来るたびにその悲しさが甦り、
私の戦後はまだ終わっていないのです。
また、未だに消息不明の
多くの仲間のことを思うと、改めて
「戦争の傷跡の深さ、平和と命の大切さ」を
強く感じています。



ありがとう お母さん。あなたの子どもはここまで生きてきました。あなたに会えますか。人は亡くなると天国に行くといいますが、私にはあの防空壕が天国に繋がっているとは思えません。あなたはまたあの防空壕の中ですか…

会えない、聞いても届かない「母の手紙」です。

ありがとう お母さん。
あなたの子どもはここまで生きてきました。
あなたはどこにいますか。
人は亡くなると天国に行くといいますが、
私にはあの防空壕が
天国に繋がっているとは思えません。
あなたはまた
あの防空壕の中ですか…